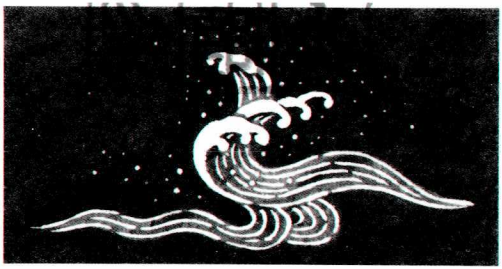
流れるを斬る

古川　薫

れるを斬る

古川　薫



毎日新聞社

流れるを斬る

一九八九年六月二五日　印刷
一九八九年七月一〇日　発行

著者　古川薫

編集人　沢畠毅

発行人　川合多喜夫

発行所　毎日新聞社
〒一〇〇-五一　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島
〒八〇三　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　精興社

製本　大口製本

〈編集担当〉石倉昌治

© KAORU FURUKAWA　printed in Japan 1989

ISBN4-620-10392-6

流れるを斬る

目　次

裏庭からの客　7
擦れ違う殺気　39
流れるを斬る　69
雪の峠　93
萩城下贋札殺人事件　117
黒兵衛行きなさい　143

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

将軍赤松邸に死す　151
瀬戸の海賊　173
獅子の廊下の陰謀　197
慧星の軍師　221
サンフランシスコの晩餐会　245
初出一覧　253

流れるを斬る

装幀　川田幹

裏庭からの客

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

前夜の嵐が嘘のように思えるおだやかな秋日和だった。風雨が満潮時とかさなったため、御船手の石垣が壊れたという。普請奉行配下の難波小十郎と石崎勘兵衛が、命じられて現場に行ったのは、八ツ（午後二時）すぎである。思ったほどのこともなく、調べを終えて休息しているとき、

「喉がかわいたの」

と、勘兵衛が、目の前の海をながめながら呟いた。

五万石のこの城下は、海に面した山裾に町をつくっているので、どこからでも周防灘が一望できる。大気の澄んだこんな日は、遙か九州国東半島の山々が、墨絵のように薄く浮きあがって見えた。

「貴公の家は、たしかこの近くであったな」

勘兵衛がさぐるような目で言う。

「左様。お立ち寄りください。茶などいれさせましょう」

小十郎が答えると、

「勤めの途中だが、仕事は早く済んだことではあるし、暫時足を停めるくらいは構わんじゃろう

て。去年貴公が迎えた嫁御をまだ拝見しておらんのでな」
勘兵衛は、鷹揚な身振りで立ち上がった。家格は難波家より低いが、小十郎より五つ年上の三十歳。肥満気味の、どことなく老人くさい男である。特別頭が切れるわけでもないのに、小十郎は何かにつけて先輩としてかれを立てている。それをよいことに、ともすれば人を顎で使うようなところがあった。
「いつ見ても百二十石にしては、豪勢な構えじゃな」
海岸近くにある屋敷町の端に、土塀をめぐらせた難波家の前までくると、勘兵衛が褒め言葉とも皮肉ともつかぬことを言う。そんな性格を承知しているから、小十郎自身は気にもしていない。だが、妻の千鶴(ちづ)にあまりのことを言ってくれなければよいがと、誘ってきたのを悔いる気持が、いっしゅん胸をよぎった。
(それにしても不意の帰宅に、千鶴はおどろくであろうな)
その顔をいくぶんは楽しげに想像しながら、玄関に踏み込むなり弾んだ声をかけたが、すぐには返事がない。小十郎は、腰の物を外して右手に持ちかえ、
「ま、お上がりください」
と、勘兵衛をうながした。

小十郎ときたら、逞しいばかりが取り柄の、色浅黒く、腫れぼったい瞼と濃い眉の目立つ童顔だから、美男というにはほど遠い。去年の秋、千鶴の嫁入りが決まったころは、意外な相手だったので、ちょっとした噂になったものだ。

同役の者は披露宴に招いたが、当時、勘兵衛は参勤の供で江戸に行っていたから、千鶴とはこれが初対面ということになる。

その千鶴はどうしたのか、家の中はしんと静まりかえっていた。下女のお道は、母親が病気とかで数日の暇をとって里に帰っており、留守居は千鶴ひとりである。

「姑のおらぬ家の嫁は気楽でよいわいの」

と、勘兵衛。相次いで両親が他界したあと一人息子の小十郎が難波家の当主となり、一周忌の法要を済ませた直後、千鶴を嫁に迎えた。勘兵衛は、そのことを言っている。

「この屋敷は、なかなか庭がよいと聞いているが……」

「何の、猫の額ほどのものです。生前の父が道楽で海岸から石など拾ってきたのですが、庭石は山から運ばなければだめだと聞いております」

「ともあれ拙者はせっかくじゃから、庭先でお茶をいただこう」

勘兵衛は座敷へ上がらず、そのまま裏庭のほうにまわって行く。

「千鶴、千鶴はおらぬか」

小十郎は大声で呼びながら奥の間に足を運ぼうとした。するとようやく慌てた返事がかえってきたのである。

畳を擦る小走りの音が近づき、千鶴があらわれた。瓜実の色白な顔に、ほんのりと上気した紅がさしている。
「お帰りなされませ」
「役所に帰る途中、石崎殿が喉をかわかしておられるので立ち寄った。裏庭の縁側でよいと申されるから、すぐに茶を……」
そこまで言ったとき、奥から千鶴を追うようにして、一人の男がのっそり姿を見せた。
「やあ小十郎、邪魔をしておる」
おどろいたことに、やはり普請方の同役で、小十郎とは幼馴染みの相川文之進が、にこにこしながら立っているのだった。小十郎より三寸くらいは上背のある長身白皙といった押し出しだ。
「石崎殿もご一緒とか。これも奇遇といってよいのかの」
などと冗談めかして話しかける文之進を睨んで、
「一体どうしたのだ」
と、思わず小十郎が、とげとげしい声を出したのも当然だろう。非番のはずの文之進が、千鶴しかいない自分の留守宅に上がりこんでいるのだから、いかに親しい間柄とはいえ穏やかではない。
「小十郎、今説明するから怒るな、怒るな」と、文之進は笑顔を崩さずに言った。「実は先刻親類の家に行っての帰り、急に腹が痛み出したのだ。どうも昨夜の食い物が悪かったらしい。至急にどこかの屋敷で厠を借りようと思ったが、あまりつきあいのない家に飛びこむのも心苦しく困っ

ているうちに、難波家の近くまできていたというわけだ」
「玄関に履物がなかったぞ」
「このような用事ゆえ、裏庭から入った。いや助かり申した」
「そんなことか」
はじめて小十郎は笑い、文之進と共に裏庭に面した縁側に出て行った。厠はその突きあたりにあるので、玄関からの声が聞こえなかったのだろう。
(千鶴は、文之進に手洗水までかけてやったのか。気のやさしい女だから)
小十郎には、従順そのものといった妻の性格が、あらためて好ましく思えてならないのである。
縁先に腰をかけて、庭をながめていた勘兵衛も、小十郎と文之進が座敷からあらわれたので、おどろいて立ち上がった。かれが立っている沓脱石の上には、雪駄がきちんと揃えてある。勘兵衛は、ちらりとそれに目を落として、
「これはこれは、貴殿もきておられたか」
と、さりげない口調で言った。
「うむ」
文之進は会釈しただけで、庭へおりた。かれと勘兵衛は、以前些細なことで口争いをして以来、しっくりいっていないようだった。
「一緒に茶を飲んでゆかぬか」
小十郎がすすめたが、まだ腹のぐあいがおかしいので早く家に帰りたいと断わって、文之進は

そそくさと引き揚げて行く。
「相川は何しにきたのだ」勘兵衛が小声でたずねるので、小十郎が事情を話すと、「ふーん」と軽くうなずいただけである。
茶を運んできて挨拶する千鶴に、
「これは噂にたがわぬ美形、うらやましい限りだな」
などと勘兵衛は無遠慮にねめまわすような目をする。
「追い立てるわけではないが、あまりゆっくりもしておれませんので……」
と、小十郎は多少落ち着かない気分で言った。

二

あの日から十日ばかり経ったころの夜。
藩の寺社奉行筆者をつとめている叔父の桜井五郎右衛門がやってきた。
「しばらく席を外してくれぬか」
五郎右衛門は不機嫌な声を千鶴に投げ、いきなり切り出した。
「小十郎、そちにかかわる噂、聞いておろうな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.